

サトイモ科 ハンゲ属

カラスビシャク (烏柄杓)

Pinellia ternata (Thunb.) Breitenb.

自生環境

畑地、野原、道ばた など

原産地

日本在来

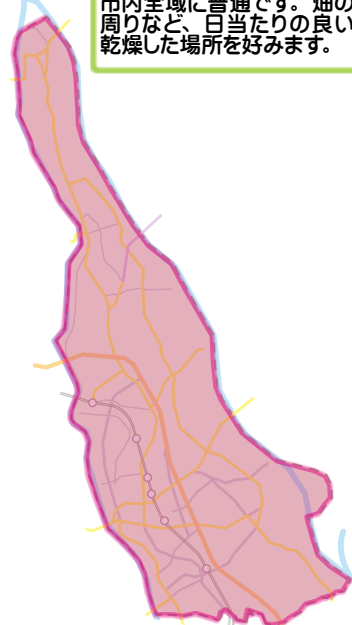
生育を脅かす要因



市内全域に生え、数も多いため、今のところ絶滅の心配はありません。ただ、生えている場所柄、除草剤散布など人間活動の影響を受けやすいと考えられます。

市内の分布状況

市内全域に普通です。畑の周りなど、日当たりの良い乾燥した場所を好みます。



特徴

- ☆ 畑地や野原など、日当たりが良くて乾燥した場所によく生えている多年草です。結実率は悪いのですが、地中の球根や、葉のつけ根と柄にできる「むかご」でどんどん増えていきます。
- ☆ 雑節のひとつの半夏生は、7月2日ごろのことで、半夏（カラスビシャクのこと）の生えるころという意味合いがあります。ただ、7月まで待たずとも、早いものでは4～5月には葉を出し、花を咲かせ始めます。花は緑色の苞に包まれるようにして咲くため、外側からその様子をうかがうことはできません。紫がかった色の苞をつける株もあり、ムラサキハンゲと呼ばれています。
- ☆ 名前は、苞に包まれた花のかたちをひしゃくに見立て、小さいことからカラスが使うものとしてつけられたものです。球根は薬用として使われ、漢方で「半夏」と呼ばれています。

へそくりの語源となった草

畑の雑草として有名なカラスビシャク。さぞかし嫌われてきたのだろう…と思いきや、案外そうでもなかったようです。「半夏」という薬になるため、農家は草取りがてら球根を集めて売り、小遣い稼ぎをしたのだそうです。球根は栗のようなかたちで、へそのようなくぼみがあるため「へそ栗」とも呼ばれます。これが農家の小遣い稼ぎに使われたことから、転じて現代の意味になったのです。



わぴちゃんねる 千葉県野田市の植物を動画で紹介!

<https://www.youtube.com/channel/UCJvrXBjegnWATWd-UZsNzCA>

